

“The Last Good Country”はNick物語をどう変えるか

息子・女きょうだいをめぐる接続性から探る

田村 恵理¹

要 旨

本論は、Ernest Hemingwayの未完作“The Last Good Country”（以下“The Last”と表記）が、HemingwayのNick Adamsを主人公とした短編群の印象をどう変化させる可能性を秘めているかについて考察する。まずHemingway作品における女きょうだいを概観し、Nickの女きょうだいを扱う事に対するHemingwayの慎重さに目を向ける。次に、“Fathers and Sons”と“The Last”におけるNickの女きょうだいと息子との接点を確認しながら、“The Last”の女きょうだいLittlelessの新規性を考える。更にNick物語の女きょうだいと息子の幼さの考察から、Littlelessの果たすへの役割を指摘する。最後に、“The Last”がStanford White射殺事件に触れている点に着目し、この物語がそれまでのNickの物語の印象を転換させる可能性を考察する。

キーワード：Ernest Hemingway, “The Last Good Country”, Nick Adams, “Fathers and Sons”

1. はじめに

1933年。この年に、*Winner Take Nothing*において短編“Fathers and Sons”が発表される。執筆開始年についてもこの作品は発表年付近とされている¹⁾。つまり1933年は、それまでのNick Adams物語群のイメージに大きな転換が加えられた時期という事になる。この作品において初めて、Nick Adamsに息子と女きょうだいがいる事が明らかになるからだ。

Nickというキャラクターは、Hemingwayのキャリアのごく初期1920年代前半から書かれ始める。1923年には既に、パリ版*in our time*第七章にあたるスケッチが執筆開始されており、ここに兵士のNickが登場する²⁾。執筆時期という観点からみればNickの物語は1923年頃からスタートし、このキャラクターのライフステージを行き戻りしながらNickの幼少期からNickの妻の妊娠時期まで触れていく。そして“Fathers and Sons”と同じく*Winner Take Nothing* (1933) に初出した“A Way You’ll Never Be”。イタリア戦線を舞台に精神的な傷を抱えるNickが描かれる。1932年この作品の完成月あたりから“Fathers and Sons”の執筆が開始される³⁾。この年までに書かれているNick物語においてはNickの家族として登場するのは父、母、妻、おじだけだった。

ところがこの後に書かれる“Fathers and Sons”において、Nickには息子と複数の女きょうだいがいる

事が初めて明かされる⁴⁾。Nickの息子と女きょうだい。彼らはそれまでのNick物語をどのように変えたのだろうか。そして“Fathers and Sons”で幕を閉じたかのようにみえたNick物語が、1950年代に再び書かれ始める。“The Last”である。約20年という長い沈黙の後再び書かれ始めた未完のNick物語“The Last”は、Nickの物語をどう転換させる可能性を秘めているのか。これを考える事が本研究の狙いだ。

本研究ではHemingwayの短編を複数横断的に扱う為、主に議論にあげる三作品についてあらかじめ簡単に説明しておく。各出版状況の説明についてはJackson J. Bensonを参照した。まず“Fathers and Sons”の執筆時期は1933年であり、初出は1933年10月27日*Winner Take Nothing*においてである。38歳となったNickが息子と車で秋の郊外を移動している内容で、Nickの少年時代の回想と車中での息子との会話が入り混じった構成である。次に“A Day’s Wait”の執筆時期は1933年頃であり、初出は1933年10月27日*Winner Take Nothing*においてである。語り手である主人公の息子Schatzは熱を出し勘違いから自分の死を覚悟するが、主人公は息子の勘違いの原因となった摂氏と華氏の違いを説明する、という内容である。そして“The Last”はHemingwayの未完の草稿の一部が編集を経て死後出版された物語である。大枠の内容は、牡鹿を殺し禁猟法違反のかどで二人の監視官に追われる少年Nickが、心配して後を追いかけてきた妹Littlelessとともに、まだ手付かずの自然が感じられる森の奥へと逃げていく、

¹ 石川県立大学 生物資源環境学部 教養教育センター

責任著者：田村 恵理 (eritamu@ishikawa-pu.ac.jp)

というものである。この未完の物語には複数の出版バージョンが存在しそれぞれにおいて微妙に内容が異なる部分がある為、本論では以下三種類の出版バージョンを状況に応じて適宜引用する。

- *The Collected Stories* (以下 *Collected* と表記) (Hemingway, 1995)
- *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition* (以下 *Complete* と表記) (Hemingway, 1987)
- *The Nick Adams Stories* (Hemingway, 2003)

2. Nickの女きょうだいにスポットがあたるまで (1) Nickの女きょうだいと息子の初登場

“Fathers and Sons”において、38歳になったNickは息子を車の助手席に乗せて秋の町を通り過ぎる。助手席の息子は眠っている。場面はそこからNickの少年時代の回想に移る。助手席で目覚めた息子に声をかけられNickは我に返る、という展開である。この物語においてNickの女きょうだいとしてまずDorothyについて、Nickの父とインディアンの⁵⁾少女Trudyの口からそれぞれ言及される。その後、Nickは父親のにおいに対して抱いていた嫌悪感を思い出しながら以下のように考える。

There was only one person in his family that he liked the smell of; one sister. All the others he avoided all contact with. (Hemingway, 1987, 375, Hemingway, 1995, 387)

one sister.ここからNickの女きょうだいは少なくとも二人以上はいると判る。このone sisterがDorothyの事なのかそうではないのかについては明確なヒントは書かれていない。しかしDorothyの名はこの前の部分で既に何度か挙げられている。もしこのone sisterがDorothyであるならばここであえて名を伏せる必要性も特にないようにも思われる。

執筆され始めてから約九年間、約16作にわたるNickの物語群から⁶⁾、読者のイメージの中に積み上げられてきたNick像は1933年の女きょうだいと息子の登場により変化する。息子だけであれば、Nickの加齢とともに家族が新加入したのだと納得できるかもしれない。しかし女きょうだい突如登場するインパクトは大きい。それまでのNick物語において少年期のNickの家庭描写はされてきていたにも関わらず、きょうだいの存在など一度たりともほのめかされた事はなかったのだ。それが“Fathers and Sons”一作において、Nickがおそらく三人以上のきょうだい構成のなかで育っている子である可能性が唐突に判明するのだから。

では息子はどうか。1933年に同時発表されたもう一作“A Day’s Wait”も考え合わせると、“Fathers and Sons”で登場する息子は更に興味深い存在となる。“A Day’s Wait”の語り手は息子Schatzを看病する無名の父親である。一方、“Fathers and Sons”ではNickの名前はあるが、逆に息子の方の名前が明かされていない。

ところが、“Fathers and Sons”の草稿には一箇所、この無名の息子がSchatzと呼びかけられる部分がある⁷⁾。執筆時期としてはほぼ同時期となるこの二作に、同じ呼び名の、それもおそらく同年代の少年が登場する以上、“Fathers and Sons”と“A Day’s Wait”が無関係なものとして構想されたとは考えにくい⁸⁾。やはりこの二作の父息子はNickとその息子Schatzと考えるのが自然だろう。“A Day’s Wait”における無名の父親を、Joseph FloraもPhilip YoungもNick Adamsとみなしているのは、このような根拠からではないかと予測できる⁹⁾。

(2) Hemingway作品における女きょうだいと息子

ここでNickの女きょうだいと息子については考察を中断して、(Nickのではない)女きょうだい、息子というモチーフがHemingway作品群の年代記においてどのような位置づけをなしているかを概観したい。これとNick自身の女きょうだいと息子の登場時期とを考え合わせると、興味深い特徴が表れるからである。

Hemingway作品における女きょうだいというモチーフについては、「ヘミングウェイ作品におけるヴァージン・シスターズ—脅かされる者から脅かす者へ」(田村, 2010)において考察した為詳細はここでは省く。執筆時期という観点に絞って考えると、キャリアの初期段階1924～1925年時点からHemingwayは「異性のきょうだい同士の親密な関係性」というモチーフをコンスタントに扱い続けてきた。“Soldier’s Home”(1925)の執筆開始時期は1924年¹⁰⁾、“The Battler”(1925)の執筆開始時期は1925年である¹¹⁾。1928年～1929年にわたって執筆された*A Farewell to Arms*のヒロインは髪を切って主人公ときょうだいのように姿を似せようとする。それにも関わらず、Nickの女きょうだいの存在が明らかになるまでには、Hemingwayのキャリアの初期段階から約九年待たねばならない。まるでNickの女きょうだいは隠べいされてきたかのようだ。そして1933年。“Fathers and Sons”でNickにはおそらく女きょうだいが二人以上いて、そのうち一人の女きょうだいとは親密であったことが一度に明らかになる。

ただし、である。その1933年からNickの女きょうだいが再登場するまでに再び長い時間をおく。た

だ「異性のきょうだい同士の親密さ」というモチーフはその間も Hemingway 作品に登場し続ける。1936 年～1940 年という期間にも、“The Capital of the World” (1936), “Nobody Ever Dies” (1939), *For Whom the Bell Tolls* (1940) でこのモチーフが現れる。そしてこれからまた六年間おいた 1946 年～1958 年の期間も、未完の草稿“The Garden of Eden”で近親姦を思わせる夫婦間の性描写に取り組むなかで Hemingway はこのモチーフを使用する。

しかし「Nick の」女きょうだいに限定すれば、1933 年以降は 1952 年の“The Last”まで描かれない。女きょうだいというモチーフに初期から意識的だったはずの Hemingway。彼の執筆史において、「Nick の」女きょうだいに限って考えるとなぜか登場までに約十年、ようやく登場と思ったらまたそこから再登場までに約二十年間の沈黙があるのだ。Nick 物語内で「異性のきょうだい同士の親密な関係」を扱う事に関して、Hemingway 自身に相当の葛藤があったように感じられる。

一方で息子というモチーフはどうか。父息子関係を扱ったものは Hemingway の作品に勿論多いが、この場合「主人公が息子」である印象が強い。しかし本研究では「主人公が父親」という位置にいる場合に絞って考える。まず 1924 年に執筆開始された“Cross Country Snow” (1925) において、妻の妊娠で Nick は父親になろうとしている。しかし子どもは生まれていない。1928～1929 年に執筆された *A Farewell to Arms* では、主人公の息子は死産となった。そして 1933 年、“A Day’s Wait”と“Fathers and Sons”二作で立て続けに息子を持つ父親 Nick が描かれる。つまり 1933 年に Nick 物語で初めて父親としての主人公が登場するのである。これ以降 Nick の息子が再登場することはない。しかし“Fathers and Sons”で登場する「フランス生まれの息子 Schatz」というキャラクター設定は、Nick 物語の外で引き継がれる。1940 年代中旬～1950 年代初頭にかけて執筆された草稿 *Islands in the Stream* である。主人公 Thomas Hudson の長男 young Tom は三人兄弟のなかで唯一フランスの生活を記憶しており、父親から Schatz と呼ばれている (Hemingway, 1970, 59) ¹²⁾。

(3) Nick の女きょうだいを扱う事への慎重さ

ここからまとめてみる。Hemingway 作品を執筆時期の観点から見た際、女きょうだいというモチーフ自体は Hemingway のキャリア初期の 1920 年代からコンスタントに登場する。しかし Nick の息子と女きょうだいはどちらも 1933 年になって突如現れる。Nick の息子は同年立て続けに二作に登場した後姿を消す。しかし Nick の女きょうだいは初登場後約二

十年の間をおいて再登場し、そこで初めてフォーカスされる。ここから、Hemingway は長い間女きょうだいという題材に執着し続けながら、Nick の女きょうだいに取組む事に関しては相当の決心を必要とした事が伺える。

3. 50 年代の女きょうだいの新規性

(1) Dorothy と Littleless

ここまで Hemingway 作品に登場する女きょうだいと息子モチーフの系譜を概観するなかで、「Nick の」女きょうだいと息子の位置づけを確認した。ここからは“Fathers and Sons”と“The Last”の二作に登場する Nick の女きょうだいと息子間の接続性を分析する。そうするなかで、1950 年代に再び現れた Nick 物語である“The Last”に登場する女きょうだいの特徴の新規性を指摘する為である。

両作品に登場する Nick の女きょうだいと息子を挙げてみる。まず“Fathers and Sons”では 12 歳未満の無名の息子が一人、38 歳となった Nick の運転する車の助手席に座っている。女きょうだいについては、Nick の回想においてまず Dorothy の名が言及される。その後、名は明かされないものの Nick が家族の中で唯一親密にしていた女きょうだいが一人いる事実が語られる。この女きょうだいが Dorothy の事を指すのかどうかについては、明白なヒントはテキスト上に見つからない。

一方“The Last”には Nick の息子は登場しない。Nick 自身が少年だからである。しかし、“The Last”では妹の存在は“Fathers and Sons”よりも前面に出る。“The Last”では妹 Littleless が兄の同行者となり、この二人の兄妹の親密な関係が前景となって物語が進む¹³⁾。Nick と Littleless の特別な親密さについては以下のようにくだりがある。

His sister was tanned brown and she had dark brown eyes and dark brown hair with yellow streaks in it from the sun. She and Nick loved each other and they did not love the others. They always thought of everyone else in the family as the others. (Hemingway, 1995, 556)

Nick と Littleless は、自分たち以外の家族のメンバーを“the others”をとらえている。この様子は、既に引用済みの“Fathers and Sons”における「特別な“one sister”」についての一節をほうふつさせる。特別な一人の sister を除いて Nick が家族の他のメンバーとの接触を絶ったと語られる部分である。“Fathers and Sons”において謎めいたかたちで言及されたあの特別な妹は Littleless だったのかもしれない、という思

いが約二十年後執筆された“The Last”を読むにおいて生まれるのは自然な事だ。“Fathers and Sons”でさしたる強調も無く語られているように見える Dorothy は、おそらく Nick にとっての特別な方の女きょうだいではなく、彼女と Littleless は別人である。このような解釈への確信をこの一節において強化する読者もいるだろう¹⁴⁾。実際 Flora は Littleless と Dorothy をはっきり別人として扱っている (Flora, 1982, 263)¹⁵⁾。

(2) Littleless の新規性

1930 年代においては無名の謎めいた存在であった「特別な方の sister」は、1950 年代の“The Last Good Country”においてようやくスポットを当てられる。こう仮定した場合、この Nick の女きょうだい Dorothy と Littleless 二人の位置づけに差異はあるだろうか。これは両作品に共通して登場する Nick のインディアンのガールフレンド Trudy を介して考える事で明らかになる。結論から先にいうと Dorothy と Littleless の位置づけは決定的に異なる。Trudy と Dorothy との描写に共通点がみられない一方で、Trudy と Littleless との描写には複数の共通点がみられるからだ。

“Fathers and Sons”において、Dorothy の存在はまず Nick の父親の口から明らかにされる。回想のなかで湖の岸辺に父親と二人で立っている少年 Nick。そこから以下のような場面になる。

He would be standing with his father on one shore of the lake, his own eyes were very good then, and his father would say, “They’ve run up the flag.” Nick could not see the flag or the flag pole. “There,” his father would say, “it’s your sister Dorothy. She’s got the flag up and she’s walking out onto the dock.” (Hemingway, 1987, 370)

その後別の回想場面に移り、Nick は Trudy と彼女の男兄弟 Billy と三人で森の中にいる。そこで Trudy の口から Dorothy の名が再び発せられる。このセリフである。“Eddie says he going to come some night sleep in bed with you sister Dorothy.” (Hemingway, 1987, 373) Nick は Trudy の兄弟 Eddie が Dorothy に近づこうものなら殺すと言う。少なくとも二人の男兄弟をもつ Gilby 家の sister である Trudy は、この場面で Adams 家の息子 Nick との性行為を楽しむ。一方で、Adams 家の sister である Dorothy が Gilby 家の息子たちと接触しようものなら死を招く騒ぎが起こるのである。この物語において Dorothy と Trudy とは互

いに男兄弟を持つ sister としての位置を強調されながら完全に隔離された別世界に存在するのである。

一方で、Littleless と Trudy の描写には複数の接続性がみられる。これは“Fathers and Sons”の Trudy (つまり 1930 年代に描かれた Trudy) と“The Last”の Littleless を比較するとわかる。まず、二人とも Nick の殺人行為を止めようと懸命だ。“Fathers and Sons”において、Eddie を殺すとうそぶく Nick に対して Trudy は以下のようにとめる。

“His [Eddie’s] mother dead,” Trudy said. “Don’t you kill him, Nickie. Don’t you kill him for me.”

… Then, having scalped that half-breed renegade and standing, watching the dogs tear him, his face unchanging, he [Nick] fell backward against the tree, held tight around the neck, Trudy holding, choking him, and crying, “No kill him! No kill him! No kill him! No. No. No. Nickie. Nickie!” (Hemingway, 1987, 373)

かなりの必死さである。Littleless はというと、彼女が Nick の逃亡についてくる一番の目的が Evans の息子を Nick が殺さないようにする為である。例えば以下のようなやりとりにおける彼女の必死さには、上記引用の 1930 年代に描かれた Trudyに通じるものがある。

‘Maybe he’ll [the Evans boy will] never come.’

‘Sure. Maybe.’

‘But I can stay though can’t I?’

‘I ought to get you home.’

‘No. Please Nickie. Who’s going to keep you from killing him then?’

‘Listen, Littleless, don’t ever talk about killing and remember I never talked about killing. There isn’t any killing nor ever going to be any.’

‘True?’

‘True.’

‘I’m so glad.’ (Hemingway, 1995, 604)

Nick の殺人の可能性については、Littleless の強迫観念というだけで片付けきれない差し迫った危険性をはらんで描かれる。Nick 自身もその願望を認めているし、何よりそれを危惧する他者がいる。Adams 家に雇われる Suzy である。彼女は John Packard に対してこう話している。“I’d kill him [the Evans boy]. I’m pretty sure that’s why Littleless went along. So

Nickie wouldn't kill him.” (Hemingway, 1995, 586) Suzy はこの直後に父親が人を殺した事を告白しているし (Hemingway, 1995, 586), John Packard も少年の殺人にまつわるトラブルではめられて死んだ友人を思い出している (Hemingway, 1995, 582, 584)。このストーリー上に殺人事件がいつ起こっても不思議でない雰囲気が用意され, Nick による殺人の可能性を高めているのだ。

Littless と Trudy の描写の共通性はこの他にも細かな点で複数ある。“Fathers and Sons” では Trudy の, “The Last” では Littless の brown legs に関する印象的な描写がみられる¹⁶⁾。さらに“The Last”一作内に限っても, Trudy と Littless の二人が Nick の逃亡の連れ候補としてパラレルな位置におかれている。出版版テキストでは *Collected* (Hemingway, 1995) のみに記載されている部分にひときわそれがみてとれる。例えば Nick と Littless との以下のやりとりである。

‘Let me kiss you,’ her brother said. ‘Just for in an emergency.’

‘Who will you kiss when you go away?’

‘Nobody,’ he said. ‘Trudy maybe if I can find her.’ (Hemingway, 1995, 563)

Collected のみに発表されている別箇所からも, Trudy が Nick の連れの第二候補である事を指摘する Littless の言葉が二か所登場する¹⁷⁾。

駄目押しをすれば, 実は売春婦のイメージを通じて Trudy と Littless は結びつく。“Fathers and Sons” の手書き草稿 382 において, 出版版の Trudy に対応するインディアン少女 Prudy Gilby は結局売春婦になったと Nick が語る場面がある。“The Last” では Littless が売春婦のアシスタントになると話す場面がある (Hemingway, 1995, 591)。

このように 1950 年代によくスポットをあびる Nick の女きょうだいは, 30 年代に名指しされた女きょうだいとよりもむしろそのイメージについて, 兄のガールフレンドであるインディアンの少女と重なりを持つのである。

4. 幼さの役割

(1) 銃と子どもたち

ここまでで 1950 年代に初登場した Littless がそれ以前に描かれていた Nick の女きょうだいとは独立したキャラクターとして描かれている事を示してきたつもりだ。続いては Nick の女きょうだいと息子との間の接続性について考えてみよう。Nick の女きょうだいと息子の年齢設定がともに幼い時期に限られ

る事が Nick 物語にどう機能しているか分析する為である。

Nick の女きょうだいと息子には 1933 年に初登場という以外にも共通性がある。どちらも銃とともに登場する点である。Dorothy に手がだされようものなら Nick は相手を銃殺すると言う。そして兄の銃口が人間に向くのを止めようと, Littless は時に銃を持ちながら必死に Nick の後をついていく。

Nick の息子と銃とのつながりはというと, “Fathers and Sons” に登場する息子は Nick にこう尋ねる。

“How old will I be when I get a shotgun and can hunt by myself?”

“Twelve years old if I see you are careful.”

“I wish I was twelve now.”

“You will be, soon enough.” (Hemingway, 1987, 376)

“A Day's Wait” でも間接的ではあるが息子と銃が並置される。熱で寝ている 9 歳の息子 Schatz をベッドに残し, 看病の途中で父親は一人銃を持って狩りに出かける。しかし Nick の物語において, Nick が息子に銃を与える時期は訪れない。“Fathers and Sons” の息子は 12 歳未満であることは上記の引用から明らかで, その言葉づかいから “A Day's Wait” の Schatz (9 歳) とそれほど年齢差があるようには見えない。では Nick の息子が銃を持たせてもらえないのは, ここで Nick が言い含めるとおり幼すぎるという理由からなのだろうか。

ここで別の息子キャラクターと銃との関係をみてみよう。1955 年頃執筆で死後出版された短編 “I Guess Everything Reminds You of Something” に登場する息子のキャラクターである。この物語の語り手は, 息子 Stevie の射撃の腕について以下のように述べる。

But I never knew anyone else that could shoot better at ten than this boy could; not just show-off shooting, but shooting in competition with grown men and professionals. He shot the same way in the field when he was twelve. (Hemingway, 1995, 682)

この Stieve は 10 歳時点で既に, 大人にもひけをとらない射撃の腕を持つ。“Fathers and Sons” の息子が銃を許されるのは 12 歳になってからだが, これはこの Stieve と比べて遅い。銃に触れる事をなかなか許されない Nick の息子は特異な位置にいるのかもしれない。

(2) 息子と女きょうだいの幼さの役割

ここまででNickの息子と女きょうだいの示す「幼さ」の役割の違いが整理できる。Nickの息子表象に特有の「幼さ」は、Nickだけに許された力を際立たせる。一方でNickの女きょうだいの示す「幼さ」には性的なニュアンスが同居し、これが1930年代の物語では兄の暴力性の発露のきっかけとなり、1950年代の物語では逆に兄の暴力性を抑える役割を果たし始めているのだ。

この点をふまえて“*The Last*”がNick Adams 物語をどう変えたかについて考えてみる。“*The Last*”において、Hemingwayは長い間抑圧してきたNickの「特別な方の」女きょうだいの描写にようやく取り組む。このNickの女きょうだい像は、兄のインディアンのガールフレンドとの接続性を多分に見せながら、兄の銃口が人に向けられる抑止力となる。つまり1950年代に満を持して前面に出てきたNickの女きょうだいは、その白人性のアイデンティティを曖昧化しながら兄のはらむ暴力性を抑えているのだ。

5. むすび

(1) “*The Last*”の1950年代性

“*The Last*”がNick物語をどう変えたか。この問題に一つの結論を出すため、これまでNickの息子と女きょうだいとの接続性を考えてきた。“*The Last*”の1950年代性は、Nickのはらむ暴力性に「迫った」部分にあると思う。Nickのはらむ暴力性については、それ以前のNick物語からも感じられる個所があった。“*Fathers and Sons*”でも父を銃で撃ちたい衝動にかられたり、Eddieを殺すと言ったりするNickが描かれている。しかしこれらから本当にNickが人を殺すかもしれないと切実に思う読者もそうはいないだろう。更にこれらの場面で示されるNickの怒りや攻撃性には、そう反応しても仕方ないと読者を納得させられるに足る理由が一応提示されている。しかし、“*The Last*”はこれらとは違う。もともとNick自身の違法な発砲からトラブルが始まっており、彼の行動に関してどんな正当化の言葉を用いても読者を納得させるには弱い¹⁸⁾。Nickの理由なき暴力的衝動がこのトラブルを引き起こした事を、ストーリー自体が明らかに語っているのだ。

そして、「白人男性の」暴力にさらされる恐怖がひきがねとなってNickの暴力性が爆発寸前の状態にある事に、このNick物語の1950年代性がある。1930年代までのNick物語においては、Nickが様々な場で目の当りにする暴力性は白人男性に限定されてはいない。“*The Battler*”では、白人男性Adよりもむしろ彼の世話をする黒人男性Bugsに潜在する暴力性に少年Nickが圧倒されている。また、森を舞台とす

る複数のNickの物語にインディアン男性のはらむ暴力性を読み取る事も可能であろう。しかし“*The Last*”における逃亡者Nickの不安の源は、これからふるわれるであろう「白人男性の」暴力に対する恐怖に限定されているかのようにも読めるのである。

この理由には、第一に少年期のNickを描く物語において、この物語ほどインディアンの生活圏とNickとその家族を含む生活圏とが同時に描かれながらもそれぞれが分断されている状態が示されるものは無い事が関係している。少年期のNickの物語はアメリカのMichigan州Petoskyを舞台に展開するものが多く、ここで白人コミュニティとインディアンのコミュニティとが共存している事も各物語に描かれている。ただし“*The Last*”で特徴的なのは、Packard氏の食料雑貨店にインディアン女性Mrs. Tabeshawが販売用に持ち込んだ手編みのバスケットが、独立記念日を過ぎた時期外れであった為に良い値で引き取られない様子、リゾート観光客にもそれ程売れないらしい様子が描かれるなど(Hemingway, 1995, 578-579)、白人コミュニティとインディアンコミュニティとの生活の分断が記され、しかもインディアンのそれが完全に背景化されて描かれている事である。第二に、“*The Last*”ではNickとその家族を含む生活圏内の、つまりははっきりと前景化された白人コミュニティ内の複雑な人間関係が、他のNickの物語と比べて極めて詳細に描かれている事も関係している。これらの特徴から、“*The Last*”においてNickが同じ白人コミュニティ内の複数の男の脅威にさらされている事が顕著に感じられるのであり、この事は他のNickの物語ではこれほど前面に出る事はない。“*The Last*”におけるNickにとっての白人コミュニティ内の複数の男の脅威については以下で詳しく見ていきたい。

(2) “*Mr. Thaw*”への言及から

“*The Last*”で何度か指摘されるNickによる殺人の可能性は、実は少女に対するレイプと接続性がある。Johnson (1979)はLittlelessがレイプされる可能性を指摘しているが¹⁹⁾、これを飛躍しすぎた妄想と切り捨てる事はできない。以下に引用するthe Unwritten Law (慣習法)に関するLittlelessとNickの会話部分には、確かに未成年の少女への白人男性によるレイプのほのめかしがあるからだ。

‘I’ve got another scheme. We’ll have a couple of children while I’m a minor. Then you have to marry me under the Unwritten Law.’

‘That’s not the Unwritten Law.’

‘I get mixed up on it.’

‘Anyway, nobody knows yet if it works.’
 ‘It must,’ she said. ‘Mr. Thaw is counting on it.’
 ‘Mr. Thaw might make a mistake.’
 ‘Why Nickie Mr. Thaw practically invented the Unwritten Law.’
 ‘I thought it was his lawyer.’
 ‘Well Mr. Thaw put it in action anyway.’
 ‘I don’t like Mr. Thaw,’ Nick Adams said.
 ‘That’s good. There’s things about him I don’t like either. But he certainly made the paper more interesting reading didn’t he?’
 ‘He gives the others something new to hate.’
 ‘They hate Mr. Stanford White too.’
 ‘I think they’re jealous of both of them.’
 ‘I believe that’s true Nickie. Just like they’re jealous of us.’
 ‘Think anybody is jealous of us now?’
 (Hemingway, 1995, 598)

ここで話題にされているのは、1906年にMadison Square Gardenで起きた建築家Stanford Whiteの射殺事件である。Uruburu (2008)によれば²⁰⁾、Harry K. Thawには事件当時21歳だった妻Evelyn Thawがいた。彼女はEvelyn Nesbittという名で少女の頃からモデルをしており、20世紀初頭アメリカで彼女を知らない者はいない程有名だった。妻がティーンエイジャーの頃著名な建築家Stanford Whiteにレイプされ妾のような扱いを受けていた事を知ったHarryが、Whiteを劇場内の公衆の面前で射殺したのである。盛んに報道されたこの事件をLittlelessの口から語らせる“The Last”に「少女へのレイプ、その報復としての銃殺」というイメージが無関係なはずはない。

“The Last”に示されるNickによる殺人の可能性は、少女Littlelessへなされるレイプの可能性と接続する。上記の引用でLittlelessはthe Unwritten Law(慣習法)を兄妹間の婚姻の正当性を訴える後ろ盾として利用しているが、慣習法は同時に「妻の情夫または娘を誘惑した者を殺しても刑事罰に処されない」という意味も含む。Nickによる殺人のイメージは、Littlelessと姦通した者に対する報復とも結びつくのである。

更にこのThaw-Whiteモチーフが示すのは、Whiteに報復したThawも、少女をレイプ同然の手段で結婚に同意させたパラノイア的な症状を抱える暴力的な男だったという事実である²¹⁾。報復した側も報復された側と同等かそれ以上に暴力的な存在と解釈可能なのである。

“The Last”で逃亡するNickを不安に陥れる存在は密告者Evansの息子、狩猟管理官Evans, Henry J. Porterの三人である。Thaw-Whiteの出来事に倣えば、少女にレイプを加えるのは年の離れた大人であるからEvansとPorterがWhiteに重ねられるアナロジーは適用しやすい。しかし事態はより複雑だ。EvansとPorterの大人二人も、Whiteを追うThawさんながらに銃を片手にNickを追う。Evansの息子も、Whiteを追うThawさんながらの執着心でNickを追い回す。Nickにとっての脅威は一人ではない。加えて“The Last”のインパクトの一つは、NickとLittlelessという異性のきょうだい間の親密さに含まれる近親姦的ニュアンスである。つまり少女に加えられたレイプの報復者としてのイメージだけが、Nickに重ねられる訳ではない。少女と姦通して報復される側にもNickは十分重ねられうる。

この物語のNickやNickを追う複数の男たちは読者にとってThawとWhiteのどちらに重なるのだろうか。しかしThawもWhiteも少女を暴力的にレイプした白人男性という点においては同じである。報復する者と報復される者との間の境界はここでもはや消えてゆく。この暴力、そして報復にまつわる境界の消滅にこそ1950年代に再登場したNick物語“The Last”の独自性があるのではないだろうか。

付記

本稿は、日本ヘミングウェイ協会ワークショップ(2016年5月28日、京都大学吉田キャンパス開催)における研究発表を元に加筆修正したものである。

注釈

- 1) Bensonによれば、“Fathers and Sons”の執筆時期は初出年と同年1933年とされている(Benson, 1990, 430)。Smithでは、“Fathers and Sons”の執筆時期は1932年11月～1933年8月となっている(Smith, 1989, 307)。
- 2) 発表は翌年。
- 3) Smithの情報に従うと“A Way You’ll Never Be”完成月と同じ月に“Fathers and Sons”が執筆開始されている事になる。
- 4) 特に“Fathers and Sons”では、Nickの息子と妹が回想場面を介して同時に登場することになる。
- 5) 本論ではネイティブ・アメリカンの事をHemingwayの作品内での表記に従いインディアンと言います。
- 6) 明らかにNickという名が出てくる作品に限定し、現在出版物において読むことのできるものだけをカウントした。出版作の削除部分としてHemingwayの死後出版されたものは1作とはカウントしていない。
- 7) Manuscript 383: p. 18
- 8) Bensonによれば、“Fathers and Sons”の執筆時期も

- (Benson, 1990, 430) “A Day’s Wait”の執筆時期 (Benson, 1990, 428) も1933年付近である。Smithは, “Fathers and Sons”の執筆時期は1932年11月～1933年8月 (Smith, 1989, 307), “A Day’s Wait”は1933年3～7月とする (Smith, 1989, 302)。
- 9) “A Day’s Wait”をNickの物語に含めるかどうかについての解釈の違いに関しては, Smithに書かれている (Smith, 1989, 303)。“A Day’s Wait”はFlora (1982) ではA Nick Adams Chronologyのリストに含まれている。Youngは*The Nick Adams Stories*に“A Day’s Wait”を含めていないが, その理由はこの話がNickについての物語ではなく息子Schatzについての物語であったからだという事であり, このストーリーの語り手自体がNickだという解釈はYoungも持っていたようである (Gajdusek 294)。
- 10) 主人公と彼の妹との親密な場面がある。
- 11) ボクサーAdとマネージャー女性との近親姦スキャンダルが語られる。
- 12) Hudsonの三男の「少し信用できない」(Hemingway, 1970, 53) キャラクターは, 1955年に執筆される“I Guess Everything Reminds You of Something”, “Great News From the Mainland”におけるStevie (Steven)に通じる。
- 13) “Fathers and Sons”においてNickの女きょうだいの姿はNickの父の目を通して語られるのみである。
- 14) LittlessがNickの「一番歳の若い妹」である事実は草稿に記載があり (Typescript 105<黒ファイル57>), *Collected*のみその点が削除され, *Complete* (Hemingway, 1987, 526)と*The Nick Adams Stories* (Hemingway, 2003, 105)にはその点が記載されている。
- 15) 以下参照。
Although Dr. and Mrs. Adams have other children besides Nick and Littless, they two are denied embodiment in the story. We know the name of one other sister, Dorothy, from “Fathers and Sons,” but never learn the names of the other children. (Flora, 1982, 263)
- 16) 少女の茶色い脚に関しては“Fathers and Sons”においてTrudyのそれについて (Hemingway, 1987, 374), “The Last”においてはLittlessのそれについて描写がある (Hemingway, 1995, 506)。
- 17) 以下の二つのLittlessのセリフである。‘And this is your second best hope isn’t it?’ (Hemingway, 1995, 564) ‘You said she was your second choice.’ (Hemingway, 1995, 566)
- 18) Nickが禁じられた行為をした理由についてSuzyがPackardに話している。そこでは, 獲物を傷つけずに銃で気絶させる方法を何かで読んで試したくてやってみたら, 死んでしまって怖くなったと説明されている (Hemingway,

1995, 585)。

- 19) Johnson (1990) 318-319頁参照。
- 20) Uruburu (2008)において, Evelyn NesbittはイラストレーターCharles Dana Gibsonが描く魅力的な女性像Gibson Girlのアイコンともいえる存在であった事, そしてStanford Whiteの射殺事件は事件一週間後には映画化までされていた事も記載されている。
- 21) Uruburu (2008)によれば, Thawはモルヒネ等の薬の常習者でもあった。

引用文献

- Benson, J. J. 1990. *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Duke UP.
- Flora, J. M. 1982. *Hemingway’s Nick Adams*. Louisiana State UP.
- Gajdusek, L. 1989. Up and Down: Making Connections in “A Day’s Wait.” In Beegel, Susan F (ed). *Hemingway’s Neglected Short Fiction: New Perspectives*. U of Alabama P. 291-302.
- Hemingway, E. 1995. *The Collected Stories*. Ed and introd. Fenton, J. Everyman’s Library.
- Hemingway, E. 1987. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. Scribner.
- Hemingway, E. 1970. *Islands in the Stream*. Scribner.
- Hemingway, E. 2003. *The Nick Adams Stories*. Pref. Young, P. Scribner.
- Johnson, D. R. 1990. The Last Good Country’: Again the End of Something. In Benson, Jackson J (ed). *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Duke UP. 314-20, 495.
- Smith, P. 1989. *A Reader’s Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. G.K.Hall & Co.
- 田村恵理. 2010. ヘミングウェイ作品におけるヴァージン・シスターズ—脅かされる者から脅かす者へ—. *ヘミングウェイ研究*. 11. 23-36.
- Uruburu, P. 2008. *American Eve: Evelyn Nesbit, Stanford White, the Birth of the “It” Girl, and the Crime of the Century*. Riverhead Books.

How “The Last Good Country” Could Change Nick Adams Stories?

:From the Connection between Sisters and Sons in Hemingway’s Works

Eri TAMURA (Liberal Arts Education Center, Ishikawa Prefectural University)

Abstract

This study considers how “The Last Good Country” [“The Last”], one of Ernest Hemingway’s unfinished stories, can change the overall image of the finished Nick Adams stories. First, it focuses on the cautious attitude towards making Nick’s sisters appear in his stories. Second, the novelty of the character Littless, the protagonist’s younger sister in “The Last,” is examined by studying the connection between Nick’s sisters and son in “Fathers and Sons” and “The Last.” Then, by considering the childishness of sisters and sons in Nick’s stories, Littless’ distinctive role in restraining the protagonist from committing violent acts is highlighted. Finally, it is explored how “The Last” could change the image of Nick Adams stories based on its brief reference to the actual shooting incident of Stanford White.

Keywords: Ernest Hemingway, ”The Last Good Country”, Nick Adams, “Fathers and Sons”